

日本語学習者の文章における叙述表現の分析

田代ひとみ

要旨

日本語の文章の特徴の一つは、文末の叙述表現にあらわれるといわれている。本稿では同一内容について書かれた日本語話者・中国語話者・韓国語話者の漫画のストーリー説明の文章(300字程度)を叙述表現から比較し、日本語学習者の問題点、日本語の談話構造の解明を試みた。

その結果、客体的表現が全体の文末の大半を占めたが、日本語話者は最も少なく、主体的表現が多かった。そこで主体的表現に注目し分類すると、日本語話者は「だ」系と説明的表現の2つに分かれ、学習者は種類が多種にわたった。また、3グループとも共通して多かった「のだ」系は、日本語話者には一定の用法・箇所で使用されていたが、学習者には日本語話者と異なった傾向がみられた。さらに、書き言葉では「のだ」の使用が本人の選択に任されている場合が多いことが明らかになった。

[キーワード] 文章の構造 叙述表現 主体的表現 「だ」 「のだ」

1. はじめに

文には文法があるのと同様に、文章にもいくつかのきまりがある。それを解明するために、日本語では、文末の叙述表現に注目するのが有効な手段の一つであると考えられている。

一方、日本語学習者の書いた日本語作文の叙述表現には、日本人のものとは異なる表現がみられ、それが学習者の文章の問題点の原因となることもあるようである。そこで本稿では同一内容について書かれたストーリー説明の文章の比較によって、それらの特徴を明らかにし、同時に日本語の文章における叙述の傾向を探っていくこととする。

文章の叙述表現に関する研究としては、牧野(1980)、永野(1986)、野村(1991)、佐々木・川口(1994)などがある。

牧野(1980)は物語文の時制転換、すなわち過去形か現在形かという観点か

ら叙述表現の分析を行い、その視覚的な状況が時制転換に影響する「総合的な空間・統括・絵画化説」を提案した。

永野(1986)は文章の全体構造を解明するため文末陳述部の辞の機能を、叙述辞(関係辞と統一辞に下位分類される)、述定辞、伝達辞にわけている。(p.242)。そして現実の文章を観察する手段として、書き手の態度による叙述表現の三分類がもっとも適切であると考え、小説・随筆・論説文などの文章を分析した。

この三分類とは以下に略述する「客体的表現(客体的事象の叙述)」「主体的表現(主体的立場の陳述)」「通達表現(読み手への働きかけ)」である。^(注1)

客体的表現:動詞・形容詞終止形の零記号(終止形で言い切った直後に想定される表現形のない要素)、「タ(過去・完了)」、「テイル」

「ナイ(動詞・形容詞の否定)など、対象を素材的に描写する表現^(注3)

主体的表現:「ダ・ラシイ・ヨウダ・」、「ノダ、ワケダ」など判断・推量・意志・説明の表現、「だ」などの否定形で、文章の書き手・話し手が対象を一定の主体的な態度で規定する表現

通達表現:疑問・勧誘・依頼・禁止の形式、動詞の命令形の零記号など文章の読み手・聞き手に働きかける表現

本稿では文章の構造の問題に注目することが目的であるので、永野の三分類によってデータの文の叙述表現を分類し、その特徴をみることにした。

野村は物語文の内容と個々の文の形との関連について述語形態(品詞、時制、アスペクト、ムード)から探った。そして変動部と無動部と語り手関与部という3つの分類により、文の傾向が現れることを指摘している。

佐々木・川口は、文末のモダリティの観点から分析し、日本語学習者には命題と説明のモダリティの文の割合が多いことが確認された。しかし文章の種類が異なると文末の表現に何らかの相違が現われることも予測される。

2. データの調査概要^(注2)

2.1 資料の採集方法

学習者: セリフのない10コマの漫画(新聞漫画をこの調査のため手直したもの)を見せ、意味がわかるかどうか考える時間を与えた後、ストーリーに関する誤解がないか確認し、「絵を1つ1つ別々に描写するのではな

く、この漫画を見ていない人にストーリーを説明するつもりで」文章を書くよう指示した。時間は40分以内。文章の長さは300字程度とした。わからない表現は辞書で調べたり質問したりせず、独力で切り抜けるよう指示した（予め与えたものは「風船」「公園」「砂場」のみ）。

日本語話者： 同じ漫画を見せ、学習者と同じく「この漫画をみていない人にストーリーを説明するつもりで」文章を書くよう指示した。時間は20分以内。文章の長さは同じく300字程度と指示した。

2.2 被調査者、採集日時、誤用の認定

被調査者：

日本語学習者（以下「学習者」とする）…日本の大学等に在籍している中上級の中国語母語話者（以下「中国語話者」とする）、韓国語母語話者（以下「韓国語話者」とする）。クローズ・テストを実施し、日本語力がほぼ同じになる範囲の者各30名を対象とした。

日本語母語話者（以下「日本語話者」とする）…日本語学習者とはほぼ同年代の日本人30名（学生17名、社会人13名）を対象とする。

採集日時： 1993年6月～8月

誤用の認定：

学習者の日本語文には誤用がみられるが、個人によりその判断が異なるものも存在する。そのため本研究では日本語母語話者（教育歴6～15年程の日本語教師）3名に添削を依頼し、3名中2名以上が指摘したものについて誤用とみなすことにした。

3. 結果と考察

3.1 「客体的表現」「主体的表現」「通達的表現」の分類の結果

全データのうち、日本語母語話者には計222文、中国語話者には計306文、韓国語話者には計206文の文があった。

文末のうち名詞で終わっているものに関しては、考えうる文末を想定して分類し、客体的表現と主体的表現の両方が考えられる場合は客体的表現の方に分類した。（例：「ひさしとゆうこは仲のいい兄妹（+です）。」「手をやく事もしばしば（+です/あります→あります）。」）

なお、セリフのみの文に関してはこの集計に入れなかった。また、学習者

の文末で「つかまなかったです」のような誤用は「のです」と解釈し、主体的表現に分類した。

以上のようにして文末を3種類に分類し、その集計を出した。その結果は下の表1のとおりである。

表1 叙述表現の三分類

	客観的	主体的	通達的	合計
日本語話者	179 (80.3%)	42 (18.8%)	2 (0.9%)	223 (注4) (100.0%)
中国語話者	281 (91.8%)	24 (7.8%)	1 (0.3%)	306 (100.0%)
韓国語話者	178 (85.2%)	23 (11.0%)	8 (3.8%)	209 (注5) (100.0%)

この割合をみると、3つのグループとも客体的表現が最も多く、本調査の文章は客体的表現が主流を占めていることがわかる。これは課題が自分の意見を述べる文ではなく、ストーリー説明の文章を書くことであることに起因すると思われる。特に中国語話者の文章では91.6%、韓国語話者のでも86.4%が客体的表現である。日本語話者は80.3%と、この中では最も低い。一方、主体的表現についてみると、日本語話者は18.8%であるのに対し中国語話者は8.2%、韓国語話者も9.7%にとどまっている。客観的な文だけで構成されている文章を書いた被験者は、中国語話者15名、韓国語話者19名、日本語話者10名であり、学習者のほうが多い。通達的表現に関しては、韓国語話者に8例と多く見られたが、これは一人称で、自己の感情を主観的に述べたものが3例、三人称であるが読み手を意識して語りかける文体になっているものが5例となっている。

以上から、本研究のストーリー説明の文章では、客観的表現が全体の大部分を占めるが、その中で主体的表現の混じる割合が日本語話者の方が高く、学習者の方が低いという傾向が出た。

佐々木・川口(1994)では、日本語学習者に命題と説明のモダリティで終わる文の比率が高いという結果が出ている。また説明のモダリティの一つ「のだ」を多用する韓国語話者の作文に言及している。本調査で、命題に関しては同じだが、説明のモダリティは少ないという数字になったのは、作文の課題の相違によるものであろう。

永野(1984)によれば、客体的表現の文の割合の大きい文章は「自分の行動

も他の人物の行動も、起こった出来事も、できるだけ客観的に述べようという姿勢・態度で貫こうとした」文章である。主体的表現の割合の大きい文章は「事情の説明であったり、自己の情感の強調であったり、もろもろの判断であったり、言ってみれば、作者がひんばんに顔を出す」文章である。この2つの違いは文章の種類や、書き手の個性によって変わることも明らかになっている。しかし、これをそのまま日本語母語話者の文章にもあてはめるのは無理があろう。日本語学習者にとっての主体的表現は、知っていても作文などでは使用されない「非用」注の一つであるとか、習得しにくいために全文章に対する割合が低いのではないかということが考えられる。また、課題のような文章には不適当だと思われるため、使っていないということも推測される。さらに、主体的表現には誤用も目立つ。

そこで本稿では主体的表現に注目し、各グループの相違点を分析・考察していくことにする。

3.2 主体的表現の種類と使用数

ここでは母語話者別のグループ毎に主体的表現の特徴をみていく。

日本語話者の主体的表現は全部で42例あった。用例数と文例をあげる。

「(名詞)だ」15 (太郎君と花子ちゃんは兄妹です。J25)

「(名詞)だった」4 (けんかに勝ったのは、妹のみちこちゃんでした。J5)

「のだ」14 (その風船を…C君にプレゼントしようと思ったのです。J7)

「のだった」3 (…泣きわめく五郎君をあとにして帰って行くのでした。J21)

「の(か)(注)」1 (なぜ、こんなに彼女が風せんをほしがったのか。J29)

「からだ」4 (…大好きなよしお君にプレゼントしようと思ったからです。J29)

「ためだ」1 (大好きな男の子に風船をあげるためです。J19)

この中では、「(名詞)だ」15例、「(名詞)だった」4例が最も多い。

「(名詞)だ」15例中7例は文章の冒頭にあらわれている。これは「(名詞)だ」が、物語の人物説明などによく使われる文型であることを示している。また「だ」「だった」の文のうち、「～のは(女の子)だ/だった」という文型が、ストーリーの展開する場面で3例使われていた。

それ以外は「のだ」「のだった」「のか」「からだ」「ためだ」といった説明的機能を持つ表現であり、それが全42例中23例と、半数以上を占めることに注目したい。(形態だけによって「説明的機能」と一括するは問題があ

るかもしれないが、ここでは便宜的に使用する。)「のだ」は、文によって用法が異なるため、後で検討する。

中国語話者をみると、全部で24例あり、以下のような文例がある。

「(名詞)だ」7 (はる君とりえちゃんは兄弟である。C2)

「(動詞)だろう」1 (あの娘は、将来、姉子になるだろう。C21)

「のだ」6 (結局、妹が勝ったのです。C12)

「のだった」1 (…万引をして、風船を自分の手に取ったのです。C28)

「(の)だろう」1 (なぜ、いつも弱い愛ちゃんがいきなり強くなっただろう。C4)

「からだ」1 (愛ちゃんが好きな男の子にあげたかったからです。C4)

「ずにはいられなかった」2 (兄さんは泣かずいられなかった。C26)

「つもりだ」1 (風船をのりお君にあげるつもりです。C2)

「ところだ」1 (石田君がすなばですな遊びをしていたところです。C18)

「ということだ」1 (つまり妹は勝ったということである。C15)

「ことだ」1 (…風船が空に飛んだのは、ぜったい許さないことだ。C20)

「～くてたまらない」1 (風船をくると聞いたら、うれしくてたまらないです。C18)

中国語話者も「(名詞)だ」は最も多く7例あるが、日本語話者に比べると少ない。「(名詞)だった」は0例である。文章の冒頭にきたのは3例だけだが、それは全体の半分弱にあたり、割合からいえば日本語話者と同じであった。また、「のは～だ」の文型は2例のみみられた(そのうち一つは「～のは(許せない)ことだ」という形式である)。

「(名詞)だ」以外を日本語話者と比較すると、説明的機能を持つ表現もみられるが、「ずにはいられなかった」「つもりだ」「ところだ」「ことだ」「～くてたまらない」といった表現が8例あった。日本語話者は主体的表現の使用数は多いが、種類は一定のものに集中していたのに対し、中国語話者は使用数は少ないのに種類は日本語話者よりさまざまなものが使われている。これらの表現のうちほとんどはこの文章にあらわれることは文法的に問題がないと思われるが、日本語話者には一度も使われなかったのが興味深い(「つもりだったのです」という文は1例あった)。一方、「のだ」を含む説明的機能を持つ表現は10例にとどまり、日本語話者に比べて少ない。また、誤用は1例あった。これは従来から数多く指摘されているように「のだ」は習得困難であることを裏付けているといえよう。

韓国語話者の使用は全部で23例あり、以下のとおりである。

「(名詞) だった」2 (うちえかえるいとちゃんでした。K8)

「ということだった」1 (問題は風船が1つしかないということでした。K19)

「(名詞) ではない」1 (いもうとは…いい子ではないですね。K25)

「(動詞・形容詞) だろう」3 (家族がいちばんだいせつでいいと思うだろう。
K24)

「のだ」10 (風船は空高く飛んでしまったのだ。K9)

「そうだ(伝聞)」1 (*いもうとは家へ帰って、たぶんお兄ちゃんと仲よくなる
そうだ。K24) (*=文・文法での誤用)

「そうだ(様態)」1 (…風船を見ながら、妹は泣きそうだ。K27)

「みたいだ」2 (*…妹は又、ボーイフレンドもなぐったみたいだ。K27)

「ようだ」1 (*お兄さんをなぐって風船を取りもどしたようだ。K27)

「なきゃ=なければならない」1 (*彼女は新しい彼を探さなきゃ。K15)

韓国語話者は「(名詞) だ」の使用が0例、「(名詞) ではない」1例、
「(名詞) だった」が1例しかないのが特徴的である。(客体的表現は全て動
詞文であった。)

そのほかは「のだ」が、主体的表現のうち10例と最も多く使用されてい
る。しかし、誤用も4例ある(そのうち1例は表記の誤用「あげようとしな
いです」である)。

また、中国語話者同様、説明的機能を持つ表現以外のもの—「そうだ(伝
聞)」「そうだ(様態)」「みたいだ」「ようだ」「なければならない」が
あがっている。伝聞・推量をあらわす叙述表現が目立つが、そのうち「よう
だ」1例「みたいだ」2例「そうだ(様態)」1例「だろう」1例は、全て1人
の被験者だけに使用されており、「なぐったみたいだ→[削除]」、「取りも
どしたようだ→[削除]」などは誤用と判定された。やはり日本語話者でこれ
らの表現を使用した者は1名もいない。この作文のような課題の場合、推量
的な表現を使う必要性がないからであることが考えられる。

以上、3グループの比較を行ったが、日本語話者は現われる表現が一定の
ものに限られ、文章中で使われる用法もある程度傾向が見られるのに対し、
学習者の方は、種類が多様にわたり、日本語話者にはみられなかったものが
使用されていることが明らかになった。しかし、その中で「のだ」系は比較
的共通して使われており、用法がいくつか分かれるようである。そこで、最

後に「のだ」の用法を分析し、考察を重ねることにする。

3.3 「のだ」類の文の問題

「のだ」の用法に関しては様々な議論があり、「ものだ」「わけだ」などに比べ、「意味の抽象性の最も高い語」(小矢野1981)という指摘もある。このように分類は困難であるが、ここでは大場(1993)をもとに用例を分けることにした。

大場は前提となる文および状況をX、命題をYとして「XはYのだ」「XはYのか」を以下のように分類している。

「のだ」

I Xが具体的に想定できるもの＝前提となる文、文脈、状況Xの補足説明Yをするもの

(a)YがXの原因・理由・根拠となるもの

(b)YがXという原因・理由の結果となるもの／根拠に基づく判断となるもの

(c)YがXを言い替えたり、実情を説明したもの

II Xが具体的に想定しにくいもの

(d)情報不均衡の是低、情報の送り込みの強い姿勢を表すもの。(情報提供)

(e)ある特定の状況において、話し手の判断で聞き手・話し手の望ましい行動を述べるもの。(当為)

「のか」

(f)疑問詞疑問文

(g)真偽疑問文

各グループをこの分類で分けると、結果は次のようになった。

[日本語話者] 「のだ」「のだった」「のか」計18例

(a)YがXの原因・理由・根拠となるもの…7例

(c)YがXを言い替えたり、実情を説明したもの…10例(うち「のだった」3例)

(f)疑問詞疑問文…1例(「のか」)

[中国語話者] 「のだ」「のだった」「のだろう(か)」計8例

(a)YがXの原因・理由・根拠となるもの…1例

(b)YがXという原因・理由の結果／根拠に基づく判断…1例

(c)YがXを言い替えたり、実情を説明したもの…4例(うち「のだった」1例) +

*1例

(f)疑問詞疑問文…1例(「のだろう(か)」)

[韓国語話者] 「のだ」10例

(b)YがXという原因・理由の結果／根拠に基づく判断…3例+*1例

(c)YがXを言い替えたり、実情を説明したもの…3例+*2例+どちらかという
ないほうがいいもの1例

日本語話者がこの課題で使用した「のだ」は「(a)YがXの原因・理由・根拠となるもの」と「(c)YがXを言い替えたり、実情を説明したもの」の2種類だけである。さらに(c)の中には、前文と「が」「ところが」などの逆接でつながり予想とは違う展開になってしまったことを述べる文が5例あった。「のだった」は3例とも全て最後の文であったが、これは「のだった」が文章や段落等の終結部に来やすい性格をもっていることを示唆していると思われる。

また、全体のうち、必ず「のだ」を使わなければならない文は(a)の中の5文（判断が分かれると思われるもの2文を含む）と(f)の1文であり、(c)の文は全て客体的表現に直しても支障がないものであった。この課題の場合、漫画のストーリーを説明するというだけで、あとはかなり自由に書いてよいことになっている。そのため日本語話者のなかでも「のだ」「からだ」を使った文章、使っていない文章の両方がみられる。ここで「のだ」「からだ」を使った文章は、前の文を意識的に説明するという機能が大きく、それによって文章にリズムをつくる効果がある。使っていない文章は理由説明を中立的に客観的に述べている印象がある。書き言葉における「のだ」使用は話し言葉の「のだ」よりも、書き手の個性・選択に任させるものが多いようである。

文章論の立場からは、林大(1964)や林四郎(1973)が、段落の末尾におかれる「のだ」について指摘してきた。永野(1986)は「のだ」が文章を統括する機能を持つことを述べている。確かに本調査では冒頭文にきたものは一例もなかったが、先行研究でいわれてきた以外の用法（「予想外の展開」など）も日本語話者は共通して使っているということがいえる。

学習者の「のだ」は、(c)が多いという点では日本語話者と共通するが、(a)の用法がほとんどみられないことや(b)の用法がみられる点などが異なっている。学習者が理由説明をする場合、接続助詞「て」を多用して文を長く繋いでいくことを、田代(1995)で指摘したが、「のだ」「からだ」を用いた文を書いていたならば、その点が少し改善されていたのではないかとも思われる。

中国語話者に1例だけみられた「のだった」が文の終結部に来ていないことも相違点といえよう。また、日本語話者にみられた予想外の展開の「のだ」文は、中国語話者で1例のみ、韓国語話者でも3例（ないほうがいいもの1例を含む）であった。さらに、必ず使わなければならない「のだ」は中国語話者で1例、韓国語話者でも1例のみであった。

以上から、「のだ」に関して、日本語話者は主体的表現の分類と同様に、いくつかの傾向がみられたが、学習者は個々人の解釈によって使用しており、用法がまちまちであること、必ず使わなければならない「のだ」の使用は少ないことが明らかになった。

4. おわりに

叙述表現から同一内容のストーリー説明の文章の比較を行ってきたが、その結果を述べる。

- ①本調査では客体的表現が大半を占めるが、主観的表現の混じる割合は日本語話者のほうが高い。
- ②主体的表現に関して、日本語話者は「（名詞）だ」「（名詞）だった」と「のだ」「からだ」等の説明的機能を持つ表現のみであったが、学習者は種類が多種にわたっている。
- ③「のだ」類の使用は、この種の文章では書き手の個性によりかなり自由に選択できるものが多い。
- ④日本語話者は「のだ」類を一定の用法、一定の箇所で使用していたが、学習者には被験者によって異なっており、際立った傾向がみられなかった。

主体的表現はこのような説明文の場合、使用しなくても何ら支障はないようであるが、他の種類の文章ではその限りではない。そのため教師は「のだ」等の用法や機能をもう一度整理したうえで作文指導をするべきであろう。また今後、それらが文章構造でどんな役割を持っているかを解明することも必要となると思われる。

[謝辞]本データの誤用の判断でご協力くださいました方々に心から感謝の意を表わしたいと思います。

<注>

- 1) 以下の説明は寺村他編 (1990) p. 78の記述によった。
- 2) 永野では「です」「ます」を主体的表現として分類している。しかし本調査の場合、文体を特に指定しなかったため、「です・ます体」「だ・である体」の両方が混在している。そこでここでは「です」「ます」「でした」「ました」はあえて主体的表現とせず、客体的表現に入れることにした。また、形容動詞の終止形語尾を主体的表現に入れているが、形容詞の終止形は主体的表現に入っているの、本稿では客体的表現に分類した。
- 3) 漫画及び調査の詳細は田代 (1995) を参照のこと。
- 4) 表1の中の合計は223文となっているが、これは1文だけ主体的表現と通達表現が重複して使われていたためであり、実際は222文である。
- 5) 合計は209文となっているが、これは3文、主体的表現と通達表現が重複して使われていたためであり、実際は206文である。

〈参考文献〉

- (1)大場理恵子 (1993) 「『のだ』『のか』の用法と習得について」お茶の水女子大学修士論文
- (2)小矢野哲夫 (1981) 「『のだ』をめぐる諸問題」『島田勇雄先生古希記念ことばの論文集』明治書院
- (3)佐々木泰子・川口良 (1994) 「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84号
- (4)田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85号
- (5)寺村秀夫他編 (1990) 『ケーススタディ 日本語の文章・談話』桜楓社
- (6)永野賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店 p. 232-294
- (7)野村美穂子 (1991) 「物語文のテキストにおける内容と述語形態とのかかわり—『蜘蛛の糸』を中心に—」『日本語と日本文学』第14号 筑波大学国語国文学会
- (8)林四郎 (1973) 『文の姿勢の研究 言語教育の基礎論 1』明治図書
- (9)牧野成一 (1983) 「物語の文章における時制の転換」『月刊言語』12-12 大修館書店

(お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻2年)